

2021年11月28日(日) 近畿旧友会ハイキングクラブ さんぽかい 「燦歩会」例会(第508回)

日本民家集落博物館で昔の暮らしを追体験! (大阪)

この日関西各地は軒並み、今シーズンの最低気温を記録しましたが、徐々に気温も上がり、のどかな燦歩日和になりました。再開2回目の燦歩会は、北大阪急行線の緑地公園駅に集合、服部緑地(豊中市)に向かいます。参加は17名。コロナも収まりを見せているようですが、検温と消毒をして歩き始め、駅から15分ほどで服部緑地に入りました。

広々とした緑地です。甲子園球場33個分、東京ドームなら27個分の広さだそうで、林の間に運動場、野外音楽堂などが点在しています。

日本民家集落博物館に入ります。日本各地の17~19世紀に建築された民家12棟を移設し、日本最初の野外博物館として、1956(昭和31)年に開館したものです。順に巡ります。

河内布施の長屋門



博物館の正門です。元は塩爺(しおじい)と親しまれた国会議員塩川正十郎さんの家の門でした。江戸時代中期の建築、「長屋門」で、入り口の右側は使用人の部屋、左側は蔵でした。

東大阪のあたりは、江戸時代、大和川の改修により新田開発が行われて発展した所だそうです。広大な庄屋さんの屋敷、日々のありようが偲ばれます。因みに塩川家は和歌山の粉河寺の縁起絵巻(国宝)に描かれた長者の末裔とされ、代々庄屋を務めた家柄でした。

旧椎葉家住宅(日向椎葉の民家)



平家落人伝説、民謡ひえつき節で知られた椎葉村(しいばそん)から移築された住宅です。急な斜面に沿って建てられたため、部屋が横一列に並んだ奥行き狭い造りだそうですが、どうしてどうして立派なものです。ウサギ小屋に住まいする身にとっては、うらやましいような広々とした空間です。

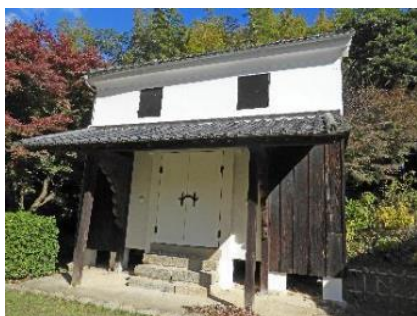
客間では時折神楽が演じられ、村人は縁側に座って楽しんだという事です。

旧山田家住宅（信濃秋山の民家）



新潟・長野県境の豪雪地帯、長野県下水内（しもみのち）郡栄村から移築された住宅です。私の最も楽しみにしていた家ですが、残念ながら修復工事中で、きれいに葺き替えられた屋根の一部しか見る事が出来ませんでした。右の写真は往時の外観です。雪囲いというのでしょうか、外壁全体に雪を防ぐために茅の覆いが掛けられています。この地域の雪との闘いについては、蛇足に若干記します。

大和十津川の民家



紀伊山中の奈良県十津川村。立派な蔵のある十津川郷土の家です。吉野杉の産地だけに、壁と屋根には杉板が使われています。軒先が重たげに見えるのは、軒下を強い雨風から守るための「うちおろし板」が付いている為です。十津川郷土は、武士身分で農業を営みながら生活、明治維新の際に活動したことが知られていますね。

南部の曲家（まがりや）





文字通り「曲がった家」です。馬の産地として栄えた岩手県旧南部藩の農家です。左手が住まい、右手が厩です。人も馬も一つ屋根の下に住む、馬への愛情の感じられる作りです。台所から土間越しに馬の様子が見え、また母家の囲炉裏の暖気が、厩にも通じるのだそうです。左の写真が厩です。

小豆島の農村歌舞伎舞台



村の神社の境内に建てられた歌舞伎舞台。毎年春と秋の祭りでは、神様に感謝するために、歌舞伎芝居を自ら演じたり、見物したりしたのだそうです。写真は盛んだった頃の様子です。

飛騨白川の合掌造



良く知られた飛騨白川の合掌造りの家です。1階は生活の場所で、2階、3階では蚕を飼っていました。1956（昭和31）年に移築され、合掌造り民家保存の先駆けとなったものだそうです。



合掌造りの前で全員写真です。
館内を一めぐりした所で昼食。隣接の「都市緑化植物園」を散策して秋を満喫、午後2時半解散しました。心地よい燦歩でした。

いつもながらの蛇足と補足で失礼します。

雪との闘い

北信濃に育った私には、「一里一尺」という言葉が、心に残っています。「ここから北へ、一里行く毎に雪が一尺深くなる」というのです。それは小林一茶の俳句にも如実に描かれています。

「これがまあ 終の栖か 雪五尺」

一茶はそれまで江戸に住んでいて、50歳の時故郷の柏原（長野県信濃町柏原）に永住する事を決めます。1812（文化9）年の暮も近い頃でした。様々な問題を抱えながら戻って来た故郷は、身の丈を超える深い雪の中にありました。一茶の鬱屈がこの、悲鳴のような句となって、ほとばしったのでしょうか。



その一茶とほぼ同じ時代、近くの越後の塩沢（新潟県南魚沼市塩沢）に、これも俳句を良くし、文筆にたけた商人鈴木牧之（すすきぼくし）がいました。その牧之の名著「北越雪譜（ほくえつせっぷ）」には、人々と雪との闘いがつづさに描かれています。雪に埋もれた家の屋根に登って雪下ろしをする男たち。下ではその雪の塊に縄をかけ、引っ張って運んで行きます。今も雪国では、これとほとんど同じような光景が毎年繰り返され、人の命までもが失われています。なす術のない、自然の暴威としか云いようのない、哀しさです。

緑地の事

なぜこれほどの広い緑地が残されたのか？これは第2次大戦中の「防空緑地」計画に因っているのだそうです。都市に空襲の被害が出た時の避難所として、1941年の防空法で定められ、大阪では服部の他に鶴見、久宝寺、大泉が指定されたのです。その4カ所を地図で見ると、大阪の中心部を輪のように囲んでいる事が分かります。それにしても、よくこれだけの緑地が残ったものですね。



服部の事

古代の事ですが、中国から朝鮮半島を経由して日本に渡来した秦氏の人々は、養蚕、機織りの業で朝廷に仕えます。著名なのは聖徳太子に仕え、京都太秦に広隆寺を立てた秦河勝でしょう。彼らは機織部（はたおりべ・はとりべ）と呼ばれ、また服部（はっとり）と呼ばれます。本拠地は京都、近江、そして淀川の領域、ちょうどこの辺りともいわれています。

時代は下って901（延喜元）年、菅原道真は大宰府に左遷されて赴く途中、この地で持病の脚気に襲われ動けなくなります。そこで里人の勧めのまま、路傍の祠に平癒を祈念したところ、たちまち健康を取り戻して、大宰府に向かったというのです。菅原道真の没後、天神信仰の高まりと共に、この社にも菅原道真が合祀されます。「服部天神」と呼ばれ、道真の故事にちなんで「足の神様」として信仰されるようになるのです。まさに燦歩会の神様です。解散後に足を伸ばして訪ねてみました。



服部のこの地は、大阪の中心部から能勢（のせ）の妙見さんに向かう街道の宿場町として、また丹波までの物流の幹線として大いに賑わいます。

いま天神さんの傍らを、阪急電車宝塚線が走っています。元来神社の境内だった所で、駅ホームの真ん中にご神木が祀られている程です。駅名は 1910 年（明治 43 年）開通時「服部天神」、後に「服部」となり、2013年に再び「服部天神」になったという事です。

蛇足の蛇足です。

服部天神駅前のパチンコ屋さん。

シンボルマークはおなじみの

「忍者服部くん」です。

暗くなるとネオンも灯るようですが、それまでは待てず帰路に就きました。



* * * *

ご案内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。メンバーは現在41名です。

入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、**毎月第4日曜日**に歩いています。

今後の予定 12月 飲食を伴う納会は取止め です

1月 第1回例会の 北・山の辺の道(白毫寺)を再訪する (奈良)

2月 燦歩会 500 回記念行事 浪花文学散歩 (大阪)

3月 おこしやす 京の五花街を巡る 続編 (京都)

参加ご希望の方は、会務担当 山村恵一 にご連絡下さい。

(電話：090-1484-4403、メール：y-yamamura@ares.eonet.ne.jp)

と一緒に気軽に楽しく歩きましょう。

(写真・文 生島 幸弥)